

熊本と静岡の広域観光連携における構想私案：水前寺と人吉

新田 時也* 飯田 節男** 宇田川 大介*** 永井 沙蓉****

A plan to promote wide-ranging sightseeing cooperation between Kumamoto and Shizuoka: Focus on Suizenji and Hitoyoshi

by

Tokiya NITTA* Setsuo IIDA** Daisuke UDAGAWA*** Sayo NAGAI****

(Received October 31, 2012)

Abstract

Suizenji Park and Hitoyoshi City, are particularly famous as tourist destinations in the Kumamoto area Suizenji Park for its Tokaido Summit and Hitoyoshi City for its many excellent hot springs. This paper proposes a private plan to promote wide-ranging sightseeing cooperation between Kumamoto and Shizuoka, with a special focus on the Tokaido Summit and Hitoyoshi's hot springs festival.

1 はじめに

熊本と静岡は、2011年7月末まではFDA（フジドリームエアラインズ）の「空の道」で結ばれていた。2012年7月には、静岡市の清水港から熊本港にガントリークレーンが譲渡された。それに熊本と静岡には東海大学が設置されている。かように深いつながりのある熊本と静岡である。本小論では、かかる熊本と静岡との間の広域観光連携について、構想私案を提示したい。フィールドとしては、とくに静岡と深いつながりが見られる「水前寺」と「人吉」とする。

2 水前寺と人吉

2-1 水前寺と東海道

正式名称は、「水前寺成趣園」と言うが、以下、「水前寺公園」と略称する。水前寺公園の成立は、「肥後細川藩初代忠利公が鷹狩の砌（みぎり）、渾々と清水が湧くこの地を殊の外お気に召され、御茶屋として作事された（中略）綱利公の代に大規模な作庭がなされ、桃山式の優美な回遊式庭園が完成、陶淵明の詩（帰去来辞）より成趣園と命名（中略）華やかな元禄時代には東屋も沢山あり、成趣園十景を選んで楽しまれ（中略）重賢公の代、宝暦の改革で建物は酔月亭一つを残して撤去され、樹木も松だけの質素なものとなり（中略）護久公の代には版籍奉還で一時官有地（中略）明治

* 東海大学海洋学部 准教授

** 元 鈴与株式会社 専務

*** 東海大学大学院文学研究科文明研究専攻博士課程前期二年

**** 恩地観光戦略研究所 研究員

11年10月7日、成趣園を境内地として細川藤孝公・忠興公以下歴代藩主を祀る出水神社が創建され今日に至（後略）」（HP：「水前寺成趣園」）。

すなわち、同園は熊本細川家によってこの地に作られたものである。図1は同園の全景であるが、この図を見ていただくと中央に突き出た裾の長い築山、右側にはそれにつづく平坦地、手前には池が広がっている。実は水前寺公園は「東海道」の景勝地を模して造園されたものと言われており（これは一説であり、定説ではないが）、「突き出た裾の長い築山」は「富士山」、「つづく平坦地」は「東海道」を表現していると言う。静岡市には東から、蒲原宿、由比宿、興津宿、江尻宿、そして府中の五宿があり、東海道を模しているという点に、静岡と水前寺公園との深いつながりが見られる。



図1 水前寺成趣園（HP：「水前寺成趣園」）

2-2 人吉と旧榛原郡相良町

熊本の人吉と静岡の旧榛原郡相良町（現、牧之原市

の一部)も、歴史的につよい結びつきがある。源頼朝による静岡遠江の相良氏の人吉移封のことである。人吉城主(図2)の出自が静岡遠江の相良氏であることは人吉ではよく知られているであろうが、逆に旧榛原郡相良町にとっては、それほど身近な歴史的な事実ではない。というのも、旧榛原郡相良町は、江戸時代には田沼意次の領地であり、そのため意次のネームバリューが高く、「田沼街道」をはじめとして、「田沼」の名跡が多く見受けられるからである。



図2 人吉城跡 (撮影：新田)

そもそも相良氏の人吉移封の理由としては、牧之原市相良史料館によれば、頼朝の逆鱗に触れて肥後国球磨郡多良木荘へ追放された「追放説」と、その後で頼朝に許されて功をあげたことによる「栄転説」が存在しているとのことであり、明白な歴史的見解は未だ確定していない([6])。いわゆる「歴史のミステリー」としての空白のため、静岡では、相良氏のことがそれほどひろく、知れ渡っていないのかも知れない。そのようなこともあって、静岡では相良氏の存在が小さいが、逆に人吉では、明治までつづいた相良の殿様として、親しみを持たれている。近年、川勝静岡県知事が、熊本との相互交流をはかって人吉を訪れた。その折、人吉・静岡・相良氏の関連について、静岡ではまったく話題にされていなかった。熊本と静岡の友好交流には、その背景に相良氏の歴史が存在していること、このことをもっと両県のセールスポイントとして活用することが大切であり有効ではないだろうか。

以上、熊本と静岡の深いかかわりをもつ二つのフィールドを紹介した。次節では、熊本と静岡の関係から一度離れて、観光振興・まちづくりに活かすことが期待される三つのアイデアを挙げる。

3 期待されるアイデア

3-1 旧地名をまちづくりに活かす

地名は「文化遺産」であり「町と郷土への誇りと愛着を新たにするもの」という認識が、このところ広がりを増してきている。たとえば、石川県金沢市においては『金沢市旧町名復活の推進に関する条例』が制定され、1999年の主計町(かずえまち)を皮切りに2012年までに、金沢市内では11町で旧町名が復活してきている。さらに2012年はじめ、埼玉県八潮市の大字である圀(がけ)近辺で行われることとなった区画整理に伴う名変更をめぐり、地名の保存を求める住民や有志からなる『「圀」を守る会』が組織され地名保存運動を展開している([3])。

熊本市は熊本城とそれに付随する城下町を基礎に発展し、2012年4月には政令指定都市に移行した。その熊本市のうち新町地区では2005年度に策定された「熊本駅都心間協働のまちづくり推進制度」の一環として地域住民との協働で2006-2007年度に「旧町名板」の設置を行った([2]、図3)。これは熊本市が「まちづくり事業の経費の一部を負担することにより、熊本駅都心間[新町・古町地区]の活力あるまちづくりの推進に寄与する」ことが目的である。



図3 熊本市の旧町名板

旧町名板などのような看板・案内板の類は設置に高額な費用や煩雑な手続きが伴うことから、これを推進する公的な事業は旧町名保存の上でも大変有益な進歩であるといえる。「地名は文化遺産であり町と郷土への誇りと愛着を新たにするもの」という認識である。しかし、日本の地名は多様な種類・多様な成り立ちを

持っているにもかかわらず評価されることは少なく、逆に消滅の危機に晒されるなど各地で冷遇されているように思われる。

3-2 苗字から土地の歴史を読み解く

わが国の苗字（姓）は25万とも30万とも言われている。その数はアメリカの約100万には及ばないものの、中国の約1万と比べても圧倒的に多く、全体の約96%が上位7,000番の苗字で占められていることから、残りが数世帯しかない希少苗字が数多くあり、それぞれに大変興味深い歴史を感じることができる。本来、わが国の苗字は土地に由来した苗字が非常に多い。そこで、その土地由来の苗字から、その土地の歴史を読み解くことで、観光振興・まちづくりに活かそうというアイデアである。たとえば、戊辰戦争により敗れた旧会津藩の住人が新しい天地を求めて、青森県下北半島に大挙して移り住み、斗南藩を立ち上げた（[1]）。厳しい気候、不毛の土地に多くの旧会津藩住人が移り住み、命を落としたとのことである（一説には16,000人の移住。実際には2,800世帯約12,000人とも言われるが、どちらにしても非常に多い人数）。そのため、青森県下北半島には、旧会津の苗字が数多く残っていると考えられている。また、熊本県の南の鹿児島県は、明治維新までは閉鎖的な処で、独特な珍しい苗字が少なくなかった。更に、トカラ諸島の支配を藩士でなく、郷土にさせたという歴史があり、その統治時代に苗字を強制的に一字にしたことが挙げられる。

熊本の特徴は、鹿児島と違って厳しい閉鎖性はなく本州との人の交流が頻繁に行われていた。室町以降、戦国時代を通して地域の支配者の交代（領主の交代）により、本州から多くが移り住み、根を張ってその苗字の地域化が進んだ。そのため、阿蘇族、相良、菊池等の流れやその支族が広く分散しているものの、熊本県の苗字の多い順は、田中（全国4位）、中村（全国8位）、松本（全国16位）、村上（全国36位）、坂本（全国38位）と、地域的な苗字というより全国的な平均的な苗字で上位5位までが占められている。あるいは、九州には古代日本人（所謂アイヌ系の人）の足跡が地名として残っている。例示すれば、薩摩（サトマ sat-oma = 乾燥せる半島）、阿蘇（アソイエ asoi-ye = 噴火口原で穴をなしている所）、遠賀（オカ oka = 河口の上手の土地）、島原（シュマバラ shuma-para = 小石の多い原）、日向（ヘウゲ heuge = 海岸が湾曲せる所）、等々（[5]）。

このように苗字をその土地の歴史と合わせることで、観光振興・まちづくりの取り組みに活かすことが

期待できる。

3-3 「ゆるキャラ」で情報発信

近年「ご当地」という言葉に脚光が当たっている。2006年に開催されたご当地グルメ日本一決定戦「B-1グランプリ」が人気の火付け役である。地元では当たり前に食されている食材・料理に脚光が当たり、集客につながることで、不況によりイベントにあまり資金が掛けられない中、金銭的に手軽に開催できる点が、その利点として挙げられている（[4]）。取り分け、ご当地のキャラクター・ゆるキャラ（R）はイベントなどに付随して参加するためPRに有効な手段だと考える。2007年の「国宝・彦根城築城400年祭」のキャンペーンで登場した「ひこにゃん」に人気が集まり、地域のキャラクターが注目され、2008年には、奈良県で平城遷都1300年記念事業協会から「平城遷都1300年祭」の公式マスコットキャラクターとして「せんとくん」が発表されニュースに取り上げられた。キャラクターの行動は、マスコミに取り上げられやすい。他キャラクターが国体、築城記念、また地元物産などのPRのために作成されていることが多い。たとえば、名産である焼酎、太平燕、チロルチョコのいきなり団子などパッケージに「くまモン」を利用している等、例は多い（図4）。熊本の「ゆるキャラ」、「くまモン」の強さはどこにあるのか。「くまモン」は熊本県の「くまもとサプライズキャンペーン」から作成されたキャラクターであるが、1つの県のPRに留まらず、背景には九州新幹線全線開業という大きなイベントが存在している。



図4 「くまモン」がパッケージに利用されている例

PR事項に「新幹線」が含まれるため関係するイベントが多い。当然ながら九州新幹線が通る福岡県、佐賀県、熊本県、鹿児島県を跨いでおり、更には東海道・山陽新幹線との直通運転をしていることから、範囲は

関西圏まで広がる。メディアに露出する機会が多く人々が「くまモン」を目にする回数も増える。その結果認知度が高まったと考えられる。つまり、「ゆるキャラ」で地元を発信することが、観光振興・まちづくりに期待される。

4 おわりに 一構想私案—

前々節では、熊本と静岡の深い結びつきを物語る「水前寺」と「人吉」を紹介し、前節では「旧地名」、「土地由来の苗字」、「ゆるキャラ」を挙げ、これらは観光振興・まちづくりに活かすことが期待できるファクタであることを示した。以上を踏まえて、「水前寺」と「人吉」における広域観光連携の構想私案を述べてみたい。

まず、水前寺公園であるが、かつては熊本の修学旅行先では必ず訪れる名所であったけれども、近年では、訪れる修学旅行生も少ない。再び熊本の観光スポットとして回復させるには、やはり同園の魅力を発信していくしかないと考えている。そこに、静岡との連携を画策したい。つまり、同園の魅力と言うと、前々節で紹介したように、東海道を模した点（一説ではあるが）である。そこで、次の二つを、水前寺公園の活性化策として提案したい。1) 水前寺公園は東海道を模して作られた庭園と聞いている。そこでこの水前寺公園で、東海道の宿場を集めて「東海道宿場サミット」を開催するのはいかがであろうか、2) あわせて、東海道の「食」をテーマとした祭典も立ち上げられないものであろうか、例えば、鞠子のとろろ汁、等。東海道というと熊本の方にとっては身近に感じられないだろうが、だからこそ、細川公は東海道を模した庭園を造られたのであろう。そのサミットにあわせて、例えば図5のような「東海道の旅人」を「ゆるキャラ」として作り上げれば、大きな情報発信の力となると考える。



図5 東海道の旅人（HP：東海my旅しずおか）

水前寺公園での東海道宿場サミット、東海道の食の祭典の開催は、細川公の思いにもつながると考えるが、いかがであろうか。

次に、人吉であるが、伊豆修善寺との連携はいかがであろうか。伊豆修善寺は鎌倉二代将軍の頼家が修禅寺（図6）に幽閉された地であり、修禅寺のほとりに桂川が流れ、湯治場の歴史がある。桂川と規模は異なるものの、人吉を流れる急流の球磨川。球磨川沿いには、人吉温泉元湯をはじめ温泉場が広がり、国宝の青井阿蘇神社がある。伊豆修善寺はシイタケだが人吉はキクラゲの山の幸に恵まれている。人吉は相良氏の居城であり、伊豆修善寺は源氏にゆかりが深い。探せば、おそらく両地の共通点は、まだまだ出てくるだろう。人吉と修善寺がこのように似通っているが、特に、修善寺の「源氏」と人吉の「相良氏」とで連携はいかがであろうか。



図6 修禅寺（HP：ノスタルジックロマン伊豆修善寺温泉 旅館組合）

というのも、現在、人吉では官民一体で大いに取り組んでいるものとして、「泉極〔せんごく〕SAGARA」がある。これは「人吉球磨温泉めぐりモバイルラリー」であり、官民による「ひとよし・くま旬夏秋冬キャンペーン実行委員会」（会長・田中信孝人吉市長）が企画している。その概略は、「各施設に掲示されたポスターのQRコードを携帯電話で読み込み、制覇湯数を増やして“天下湯一”を目指」すことで、「無名武士」からスタートし、施設を多く回ると「相良家の傭兵」「筆湯家老」などと階級が上がっていく仕組

み」の湯めぐりキャンペーンである。「3施設を“制覇”するたびに5千円相当の特産品か人吉産米が当たる抽選の応募権を獲得。全施設を制覇すると、特製の湯おけと手拭いがプレゼントされる」(熊本日日新聞、2011年11月9日付)。人吉の「天下湯一」、「人吉球磨温泉めぐりモバイルラリー」は、人吉の相良氏を題材にした「歴史と温泉での地域おこし」である。そこで、人吉と伊豆修善寺とは、伊豆修善寺の「源氏」と人吉の「相良氏」という「歴史」の観点で、連携交流をはかれないものだろうか。具体的には、源氏と相良氏を題材としての「修善寺・人吉温泉めぐりモバイルラリー」企画、両温泉地で互いの物産の展示・販売、「食文化」の交流(人吉のアユ、修善寺の黒米、等)である。両地の地名、人名の類似点もおそらく探せばかなり多く出てくるだろう。温泉・地名・人名のファクタで両地を結びつけることが出来れば、相乗効果が期待できよう。

以上、深いつながりのある熊本と静岡をいかに連携させて観光振興・まちづくりを考えるかにつき、構想私案を述べてきた。この構想私案が、民・学・官の協働で実現できるよう、今後とも働きかけをしていきたい。

参考文献

- [1] 石光 真人『ある明治人の記録 会津人柴五郎の遺書』、中公新書、1971年。
- [2] 熊本市 編『熊本市新・旧町名一覧表』、熊本市地籍調査課、2012年。
- [3] 全国地名保存連盟「わが国唯一の「垢」の地名保存についての誓願」、2012年。
- [4] 田村 秀『B級グルメが地方を救う』、集英社、2008年。
- [5] 知里 真志保『地名アイヌ語小辞典』、北海道出版企画センター、1984年。
- [6] 牧之原市相良史料館「相良氏資料」。
- [7] 山村 高淑『アニメ・マンガで地域振興』、東京法令出版、2011年。